



デザイナーへの道を知る 30人の言葉

美術出版社

石田純子 著
デザインの現場編集部 編

酒井俊彦

根拠のない自信も「信念」に変わりうる



プロダクトデザインはもちろん、情報機器のコンセプト立案や産業活性プロジェクトのデザインディレクションと、酒井俊彦が手がける仕事は多岐にわたる。それらに共通するのは、そこに「こうありたい未来」「より楽しい遊びのある物語」「求めている暮らし」といった概念が、色濃くにじみ出ていることだ。「モノ」を「カタチ」に落とし込んでいくことだけを考えていては決して生まれない、地に足のついた生活提案が、そこにはある。

「図面を引いてデザインを形に落とすことには、それほど執着していないんです」と酒井。ならば、と問いかけてみた。この業界ではほとんど前提と化している、メーカー側が原形となる機能を用意し、それをもとにデザイナーが付加価値としての形を考えるとというプロセスは、窮屈ではないですか、と。

「確かに違和感を持つことはあります。メーカー側は、モノにデザインをプラスして売れる商品にしよう、他社に勝とうという文脈ですよ。もちろん商品が売れなければ会社が傾く可能性だってあるのだ



上段右：「soi sofa」(ムーアジャパン 2008年) 薄くて軽やかなデザインのソファ。背もたれがしなり、見た目の印象よりも柔らかな座り心地が得られる。

上段左：「BODi BEAT」(ヤマハ 2007年) 走るスピードに合わせたテンポの音楽を自動選曲してくれるミュージックプレーヤー。

下段：「おいしいキッチンプロジェクト」(2005年～) より、「ボンボンガラス洗い」(デザイン／wool,cube,wool!)、「ベジネット」(デザイン／Goma) 酒井はプロジェクト全体のデザインディレクターとして参加。



から、当然かもしれません。だけど僕は自分が欲しいものや、他の人がこんなものを欲しがってるんじゃないかという視点で話をしていくわけです。すごくシンプルな論理なのに、噛み合わせるまでが大変。エネルギーがいります」

そんな酒井の真骨頂は、機能と形の分離を前提にしない、コンセプトモデルのデザインに表れる。その際も、最近では形という表層のみをとらえられるのを避けるため、あえてモデルをつくらず、ストーリーで見せることもある。

あるメーカーからの依頼で取り組んだ「3～5年先の家庭におけるAV機器の未来形」というテーマでは、提案を一冊の絵本にまとめて提出した。建築家などの登場人物が、家の中にあるAV機器について、さまざまな疑問を投げかけ、考えながら、未来の製品の姿を探っていくというストーリーである。「パワーポイントの企画書だとあまり見てもうえないけど、これなら手に取りたくなるでしょう?」。信念を持って自分のデザインを推す努力は、プロ

のデザイナーの仕事の一部でもあるが、酒井がとりわけそれを強く意識したのは、学生時代。東京造形大学でインダストリアルデザインを専攻していたが、「たぶんクラスで下から2番目くらいだったんじゃないか」と笑う。「すごくダメな学生なのに、自分はイケてて、ちゃんとしたデザイナーになれると何の根拠もなく思っていた。そのままだったら本当にダメだったかもしれません」。

そこに変化が起こったのは、授業の中で同級生が制作したタイプライターのマケットがきっかけ。

「カバの形で、歯がキーボードになってる。面白いと思って見ていたら、偉い教授が『こんなものはプロダクトじゃない。つくり直せ』と激怒したんです。本人が直そうとしたときに、別の若い先生がやってきて事情を知り、『偉い人に直せと言われたら直すのか』と。本人は混乱していましたが、僕にはそうか、と思えるものがあつた。疑問があるなら、他人の基準をうのみにするのではなく、自分で検証することが大事なんだと気付いた。検証した結果、直す

ならそれでいい。逆に自分は間違っていないと思えば、それを伝える努力は必要ですよね」。

その出来事を機に、酒井の「根拠のない自信」は「揺るぎない信念」へと変わっていく。

「でも一方で、いいじゃん、美しければ」とも思う。建築家の清水文夫さんの言った言葉なんですけど。堂々巡りで煮詰まったときは、その言葉に戻る。複雑で、時にやっかいなテーマに、楽しく鮮やかな回答をもたらす酒井の発想のよりどころは、そんなシンプルな一言にあった。

酒井俊彦（さかいとしひこ）

1964年 高知県生まれ。

1987年 東京造形大学卒業。

1989年 コーゾーデザインスタジオ入社。

1991年 同社退社後、1年間にわたり渡豪。デザインニュース誌「オーストラリアンデザインリポート」に連載を執筆。

1992年 帰国。サカイデザインアソシエイツ設立。

プロダクトや家具のデザインを手がけるほか、最近ではプロジェクトのデザインディレクターとしての仕事も多い。2005年より法政大学工学部システムデザイン学科の講師を務める。

デッサンの練習、したほうがいいよ。